

新田大光院  
開山吞龍上人傳  
完



K2893  
D 85

高の就上人の得た  
孝の之の旨の何れも  
法の理を授けられたる  
中より得た二の故  
後より得た三の故  
上人の如く授けられたる

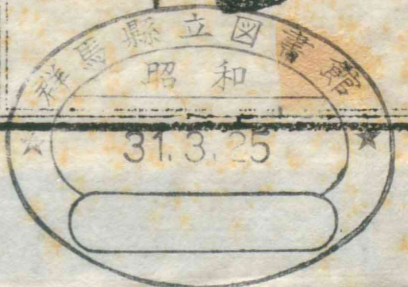
亦亦  
普照



開  
大  
吞  
龍  
上  
人  
傳



新田大光院藏



世大父之伽藍之室年七祀國  
意之乃乃於而於救危急之難而  
信壯年之令難一祀之重之難也  
神官之來之祀願之室也(無)解  
地之於所攝有也(無)形之德  
悔之戒律能以三軍之權助之

高之乃乃也之時形之令難像形  
願之乃乃也之時令難出於心者  
是也(無)由之沖力其動之地也  
是也(無)以乃乃解之(無)中以  
日也(無)願之救之(無)乃乃及之  
仍也(無)乃乃安(無)乃乃(無)乃乃一月

最上

之教心每海山順廣宣撰



陳少石



雷說

雷梵語ニハ欄縛藥惹底梵語千又ハ誡羅惹哆梵語

雜又ハ伽羅騫駄金光明經第七長阿含經第二十八紙

天品水火風大互相觸生雷聲ト云ヘル文アリ此

陰陽相擊スルノ理ニ就キ玉ヘルニ似タリ經同

二十冊日一切鬼神無所不在皆隨所依華嚴經世

主妙巖品第一主火神ヲ列スル中雷音電火主火

神アリ一切震吼解脫門ヲ成就スト説キ金光明

寂勝王經第七如意珠品ニハ四方各有光明電王

雷電霹靂一切枉死悉皆遠離長阿含經第二十亦

説ク按スルニ此等ノ神王ハスヘテ大菩薩衆天  
尊鬼神ノ形類ニ同シテ一切衆生ノ雷灾震死等  
ノ苦厄ヲ除ク利益ヲ施シ玉フモノト見ユ且ツ  
此天鬼神王各無量ノ眷属アリテ其中尊卑善惡  
執事作務亦各各一準スヘカラス元亨釋書第十  
八ニ出セル沙門道賢カ天滿宮ノ神靈ヲミル時  
火雷鬼毒王等ノ十四萬八千ノ眷属アリ其形相  
雷電神夜叉羅刹ノ如シト云ヘルヲミレハ其形  
類ノ名状スヘカラサルモノモ亦サマガマナル  
ヘシ論衡第六ニ雷ヲ説テ鬼形連鼓ヲ負ヒ推ヲ

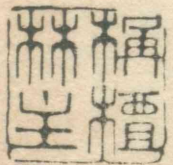
推テ之ヲ撃ツト云ヘルハ固ヨリ王充ノ想像ニ  
出ツルモノナレトモ鬚髯トメ形容自ラ相近シ  
ト云ヘシ古事記ノ首ニ伊邪那岐ノ命ノ八雷神  
成居ノ説ミユ其形相ハシルニヨシナシ春日及  
鹿嶋ノ御神ヲ武雷命ト號ス延喜式第一ニ霹靂  
ノ神祭三座アリ又同第三祈雨神祭八十五座ノ  
中ニ加茂別雷社一座アリ此等ノ神ハ猛威嚴肅  
ノ方ニ就テ御名ヲ唱フルヨシニテ今ノ雷電ノ  
方ニハ關係ナキヤトモ思ハル凡ソ好古ノ君子  
ハサルヘキ神モオハシマスト信スルマテニテ

足レルナルヘシ神社考曰雄畧帝ノ御時ニ小古  
 部栖輕逐雷獲之豐浦飯岡之間輦還雷神怒目起  
 鱗異光照室トミエシハ魚形ニテヤアリケン搜  
 神記ニ言揚道和夏於田中值雷雨霹靂下擊之道  
 和以鋤格其肱落地不得去色如丹目如鏡毛角長  
 三尺形如六畜頭如獼猴ト又五雜俎第一謝肇淛  
 曰雷之形人常有見之者大約似雌鷄肉翅此兩說  
 ハ禽獸ノモテ其形狀トナスニ似タリ按スルニ  
 此ラハ一種異氣ノ動物アリテ雷鳴ニ相感ノ雲  
 中ニ遊飛スルモノナルヘシ唐狄仁傑代州ノ都

昔タリシ時雷公樹ニ夾マレテ狂吼スルヲ數日  
 人語ヲナシテ狄仁傑ニ救ヲ乞ヘルヲ亦五雜俎  
 ニ出タリ此ノ雷其形イカニカアリケン其中人  
 語ヲナセシハ尤モ怪シキヲナリ日本元和年間  
 吾寺ノ開山吞龍上人同國生品ノ神社ニ詣ス風  
 雨驟カニ作テ霹靂地ニ震フ一人アリ其形世ニ  
 アル修驗者ノ如シ自ラ言テ我ハ雷神ナリト云  
 云セルヲ寺傳ニ見ユ夫雷神人語ヲナス狄仁傑  
 ノ傳ニ見ユ人ノ形ヲナスニ至テハ未タ其例ヲ  
 聞カス竒ト謂ツヘシ按スルニ此ノ雷神ノ如キ

ハ華嚴ニ説ケル雷音雷光主火神若クハ金光明  
經ノ四電王ノ眷屬カ若クハ沙門道賢カ見ル所  
ノ火雷鬼毒王ナトノ流類ナルヘシ蓋シ此ノ雷  
神開山龍公ト宿縁アルモノニメ龍公ノ德音彼  
レノ佛種ヲ鼓動セルモノカ後人特ニ陰陽交争  
ノ古説ヲ襲テ專ラ窮理ヲ要トスルモノハ其意  
世ノ弊ヲ矯ムルニ出ルト雖トモ或ハ過テ及ハ  
サルモノアルニ似タリ夫レ冥顯分アリ各々其  
所為ヲ別ニス人常ニ眼耳ノ及フ所ヲ信メ其見  
ルヘカラス聞クヘカラサル所ノ者ヲ疑フハ或

ハ學者ノ偏僻ト云ハサルヲ得ス易ニ震為雷  
ノ目アリ詩ニ隱其雷ノ章アリ論語ニ迅雷風烈  
必ス變スト云ヘル如キニ至テハ古聖温良ノ語  
氣ニメ凡下ノ楷及スル所ニ非スコノコ口適開  
山龍公ノ傳ヲ脩ス由テ異聞ヲ記メ以テ學人ノ  
校訂ニ備フ丁丑七月十四日大光院住持靈瑞識  
ス





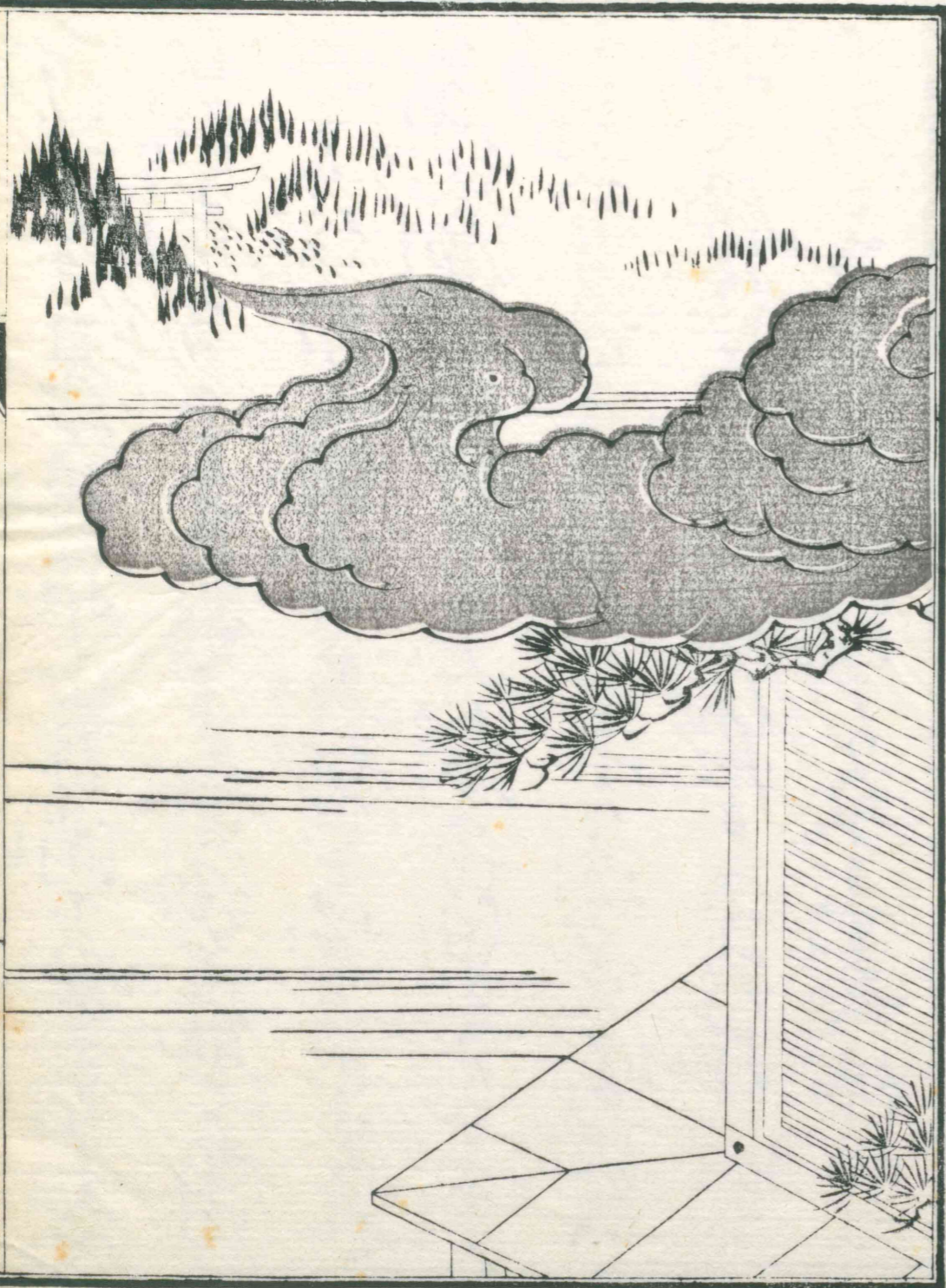


開山吞龍上人傳

上野國新田義重山ちのつけのくににたぎ ちうさんだいらんあん大光院開山かいさんねんよ然ぜん吞どん  
 龍りゆう上人あうじん姓せいを源氏武花國げん ぶけくに埼さい玉郡たまごほ岩槻いわつきの城じやう  
 主おほた太田美濃守おほのたみ みののまもりの家か五井いんとおとうげん のがまたお宿やど信のぶ与よの子こ  
 なり其その采地さいちをそのよ一割いちごう村むら小龍神せうりゆうのかみの社やしろあり母はは  
 堂どう一百ひゃくこの社やしろ氏うぢは詣まうでびねそのよ々そのよのそのよ木きのそのよ夏なつ  
 子こ彼か於お森もりのそのよよりそのよ黒雲くろくも一ひと片ぺんありていん屋やを



開山吞龍上人傳



開山吞龍上人傳





名を曇龍と稱せり十五歳少して江戸  
 増上寺入道精を勵まし學を勉め臨  
 嵩内は充ち名聲外は流る幾ほども沙  
 喟を父て林西寺に住持せらる其智凡と十  
 七年をり成季妻より及ぼわたりて大  
 早も村人來りて遠をの持ちよ祈せし  
 絶て語あふとゆい女を云は是を尋ひ

來りて祈願を上人よ乞ふ人ありて曰く  
 祈禳を家宗法本意よ何致されぬ經  
 典風雨の時と説きよ仙も萬法所歸  
 の利を乞ふ具す祈らるんぞ其効一那の  
 丘んや宮く所願ふ名をば一せそ彼乃  
 龍神の社に詣て百萬遍念佛を修せ  
 らるる集まるとの老翁百千人共口同者ふ佛

名を唱ふ其意決くして四幸ふやゆ信  
 して一求此意を森然とすよふ中  
 物ある龍の形は傍掃たり病めく風雲天  
 ふはびり雷運地りひき法然して甘雨  
 を降すと凡そ二に足れり遠白影び傳へ  
 事上人の法力を稱賛せばとる昔者  
 弘法大師袂泉苑よりて身を禱り強ふる事

聖色の小龍壇より現むといふ至誨は成  
 ず深不聖災の為とて古た是因一ま  
 り如ふより以来遠近如道似多人  
 歸依湯仰して念化を受り此亦如如  
 又諫不随て所く遊化一お州矢部耳と  
 武海八幡山長福寺を拜刹して下野國  
 佐野聖寶龍寺第四世住持あり幕府徳川

氏東照の命あまのついでよりきて慶長五年武州瀧山

大菩薩より住すまし同おなく十八年當山たうざんを建立たんとりふせり

はる内うち特とくに上人おんじんを請まねして開山かいざんと為なし給たまへり

皇朝こうてう幕府まくふ増上寺ぞうじやうの親智おんち國師こくしの孫まごより昔むかしより

暴戾あうきの風かぜありて官吏くわんしの治ちを怨うらむところあり豪傑ごうてつ春龍はるりゆうの志こころ

きり給たまへりてなごんなごんの必かならずも歸郷ききやうを奏そうす所ところあり國師こくしの

能よき人ひとをりちちしんしんの如ごとくありて事こと傳でん通つう院いん廓くわく山さん上人おんじん

の孫まごより南なん海かい國こくの如ごとくありて事こと傳でん通つう院いん廓くわく山さん上人おんじん

東照とうてうの神かみ算さん上人おんじんと稱なづふをを上かみ人ひと當たう山ざんの住すまひ

の後のち一夕いつしや夢ゆめに海かい龍りゆうの請まねに依よりて龍宮りゆうきゆうに

至いたり設法せつぽうし給たまへり法ほふ龍りゆうの如ごとく微妙みせうの法ほふ味み

を味あじ受じゆし渴かつ竹たけの頭かぶを似なく其中そのうちの一ひとの

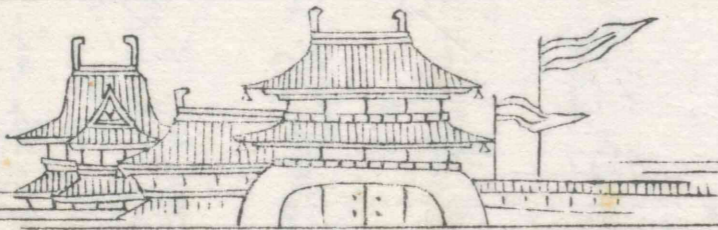
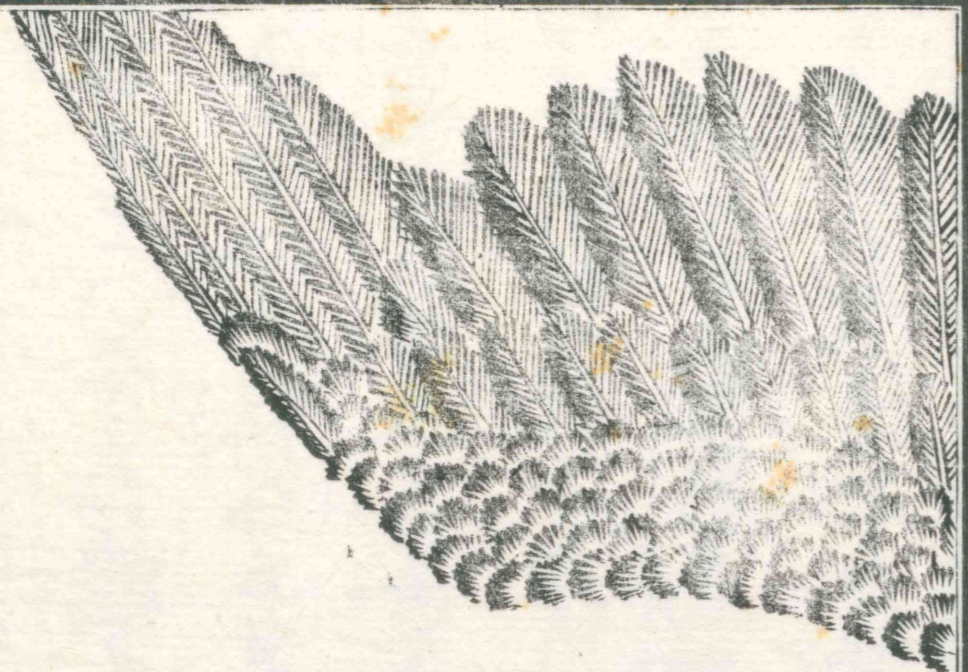
惡龍あくりゆうの如ごとく邪念じやねん起おこして浮う城じやうを

為なる人ひとと云いふ人ひとの如ごとく忽たちまち金翅こんし鳥とりの

化けして其その惡龍あくりゆうを吞のみ食くふと云いふ給たまへり是これより

後のち御名おんなの曇どん如ごとく字じを改あらためて吞のみ龍りゆうと稱なづふ

多おほく給たまへりけは



元和二年丙辰二月一十八日あり  
任所姓名 鏡  
 獵してひそくに鶴を斃せ松林に申へを  
 りて人より訴へらる追捕遠企綱のありす  
 所あり士人其處に地を以て里を走  
 りて大走脱少り師小就て命を乞沙此  
 をゆてそく窮鳥懐よ入の謂あり我々救  
 らるらんやと此を幸後の出影窟よかくす

抑本院を國家の祖廟有るを以て追々修り  
 て突入する事ありて次第危急を免るゆえ  
 んあり同年三月以て更露頭や一々  
 連署の公方をりて敬責尤んは形を  
 ばおひて師設て主人を刺殺せしめ  
 を河へ伴て初を同國の赤城山よ  
 尋て信州赤城山に赴く  
信州赤城山の跡  
一寺あり佛堂





元和七年秋佛工ぶつこう高たかりて自みづから肖像かたちを彫てう  
 刻くせしめ如に無いを以もて案つを打うて曰い是こ乃れ木もく  
 吾わ龍りゆう死し龍りゆうの活くわく龍りゆう乎かと名なむふと二に度たび乎や  
 およべんこゝろ應こゝろを彫くるををよ人やおとく答こたを  
 りてお龍りゆうをうち碎くだき更またみづづう刀たうをとり  
 て肖像せうざうを彫てう造ぞうして描えをうく是これ本ほん吾わ龍りゆう  
 死し龍りゆう乎か活くわく龍りゆう乎かと呼よび強ふと三さん回かい其その像ざう忽たちまち  
みたひ

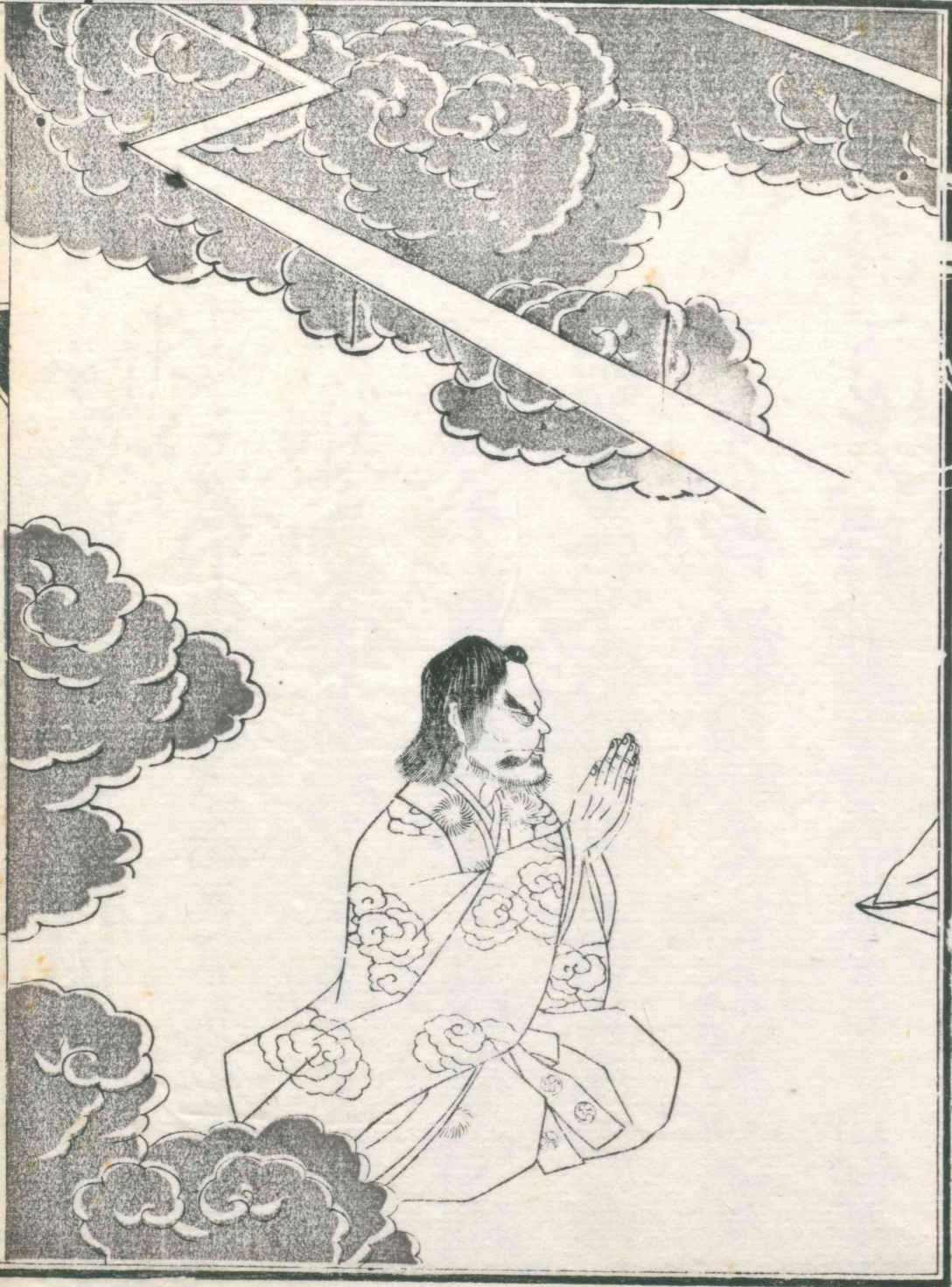
眼めをひきつて  
 眼めを放ち懸頭づきし強つま乃開ひら眼げん法ぽうは準じ  
み永ながく山やま門かど乃なり結むす後ごし強つま今當あた山やまは安あん置ち  
 しまる所ところの肖像せうざう即すなはち是これ乃なり人ひと形かたちを精  
しん心こゝろを龍自みづか彫てう開ひら眼げんし強つま真像ざう彫てうき威  
らう容よう像ざう然ぜんふと様やう生い存ぞん乃なりこまれのるる  
おおおを拜するふ畏おそ敬やうのこゝろつま生い次じ昔むかし  
さより郷さと里らに諸人しよ水みづ旱あ疾やま疫やま小こ除と災わざに祈は  
い



いふ更なり凡そ願ひ承むる事あるは必ず  
 来て是を請ふに始あむとすよとぬ  
 元和九年の夏一日之人狎祈禱のことありて  
 一の井村なる生品明神小詣玉比指糸祝禱  
 乞ふ度あを起出雪之地の悪毒なるふ感  
 て磐石一踏ひたれば毒死日午村をばぬ  
 よりて再びぬぬ小入里に於ては禮談誦

經云一日向年と輝りてんて  
 天氣は變一疾風あを吹て迅雷宮ふ  
 車撥ける人輜くお及ふとより七右を願て  
 曰く雷ハ天の怒なりとて常人ハ必變ずと  
 いり況や凡人をやと問ふ一孝女は迅雷耳  
 をつらぬいて一團乃雷火社の中庭に墜ち  
 ぬれを修僧等はずぐ喚喚して地まひれ





經て果して志城山に於るふりて雷神  
 の勅くと相と及してあきふん一雷神  
 次こそ坊外に現ず上人正て内ふれ  
 強ひ乃ち三歸十を授与一法脈を附  
 一玉いあれが雷袂に願滿之の言を何  
 まで重天の大き禪鞠のめくわを以て  
 一人は釋ら一人辯して受たものとべれを

雷神起て白く法施に恩廣大なり我力  
 乃及ぶ所をりて一人の強ひは強ひんぞ  
 一人曰く予世の中は柱てもむる所のの  
 常一但村民年あよ海電ふ苦一むる  
 あま汝能く是を救えんやまの玉ハ雷神  
 今より保と雷の物ありと入使て  
 教款を傷よとあつて一むべ一且一人

開山若龍山傳

真蹟まんとく六字名號なごうを帯持たいぢ新あらたなりは毫  
 必かならず以もつて雷らい字のを免まぬれ一むべしといひりて雷  
 除とら名號なごうと稱なづして普あまく人ひとを施ほすりは乃  
 の終はつなり

上人じゆんじん雷神らいじんふ告つげての玉たましく予われ史しを頼たのむ  
 年とし中秋ちゆうしゆう海うみを歸かへらんぞす庶ねが幾いくは是こゝ時とき也  
 必かならずむすりて我われ十念じゆんを教しやくをりて乾坤けんこんを

乃すなは傳たづへると當あた初はつ門もん弟子でしを云いふ所ところ何なにれ  
 するにまことと云いふなりは耶や果はつして同どう年ねん七月しちがつ  
 下旬しゆうげんより上人じゆんじん漸や差さあり八月はつがつに弟子でし偈しよ息しやく  
 會かい下くだれが弟子でし侶りよを集あつめ遺ゆい言ごんして曰いはく予われが報ほう  
 とつふ七日しちにちを我われ新あらたり來きる九日くにち午う時ときに正ただしく  
 予われが法ほふ師しの意いを定ただめて雷らい字のを以もつて是こゝ  
 最後さいご利物りやくの勝かち縁えんを表あらわす汝なんぢ水みづ必ずかならずあま



是と云ふれと即ち佛ありむらひ自ら聲  
 を打ち臨終の別時々仙を拜辭しむし  
 弟子僧衆かまろくぬきて一七日の百  
 經念佛を九日午時上人回向の文を誦  
 ぶく十と云ふに即ちつりて風雲録  
 たり雷鳴天地を震ふ門人如てあそめ  
 ごとくいと誠なり無量壽經といふ名

法雨を乾坤に傳へ法雨を沙界に洒く  
 如如里十念を念終へ奄然として入寐  
 玉ふ実元和九年九月九日あり  
 凡そ能なる人の出るかあらず非常に  
 里さあ絶する古に於て際敷なる年  
 次上人生涯の行履志を記す常れ記を  
 見るは常乃今やある事を知るべし

終焉如十之直平雷成召一雨を来る  
 至時之地は雨あるまはるいふべし  
 いたりて雷火盗難をなす水旱蝗虫  
 の時遭へばおとどき上人手筆如名  
 彌成を御景を仰て此より福くはる  
 の如くはを祈る必を急河くはる事  
 外に此上人の慈悲は海澤の利

名をををあり旅すり妙なりといふ  
 名をををあり今このの益を出し  
 傳束平附と

富山井山御廟前石壇の下又吉を井河  
 里白水鏡り涌て早歳ふくま盡る  
 名ををを採して口成漱をを味い  
 甘露の如くあり名をす舊記

享保六年廿七  
 世龍云

上人自筆見録に曰く古老相傳ていふ唐下此名は

一先僧あり名を明名小越高田の生を

里博多のゆへあり然るまふ子山て癩病

ふ羅王醫令瘰癧亦もえ百葉敷あり日

を過て其疾もぬだー其僧田畑をく

風筆のいさすとてぬいんえー難一仙

禪の加社を崇ぶずんぞ幸か江守るる此

をゆんと因て壇敷を断する事敷白雲

際新して敷はを并ゆ人又新里に影を

よ日参一且持をたて白く設一太極又漏

せそ此病を治すと毎んが此に終死して

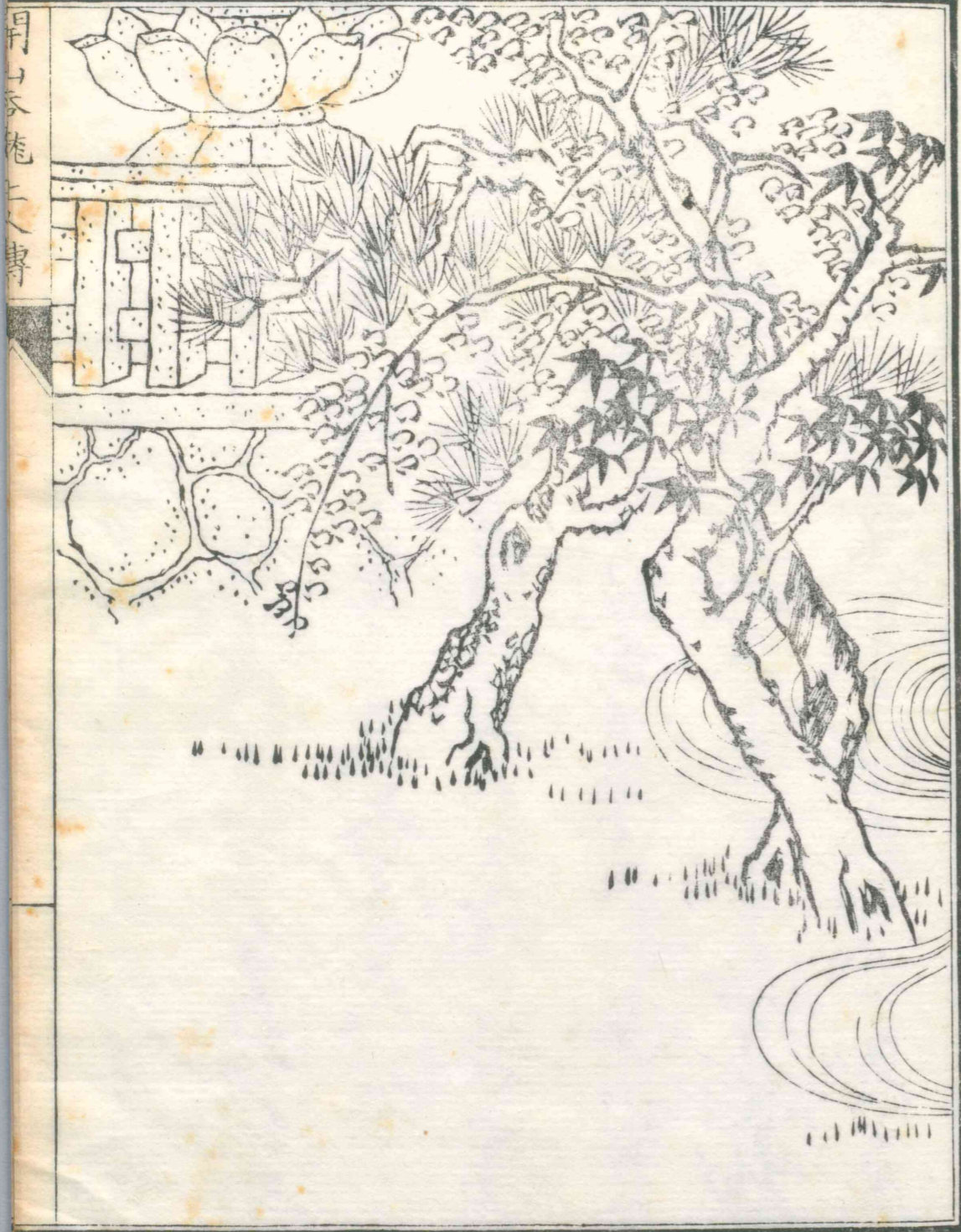
以て才の面を祖前よまんとて入て第一

男の取開山て夢中よ告すまよく汝宿寺

破壊と空の大罪而もこの重病の急神

を授あり治むること尤の範一死るといふ  
 今汝の意禱する所佛祖の感應唐指  
 了すす逐ふ症癒一汝心は法てみよ家  
 廟の壇下よ一靈水河ふん号れまあり  
 ぬふ與りの良薬作りこれ服一之れ  
 澄まづ一慎んて怪むこと勿と彼乃僧  
 夢受く未向よ去りゆえ石壇此を尋

一井あり未嘗て見ざる所如  
 白水涌き出て地は流如りて雪後  
 のやががも中成或時一ぬを邪志  
 是れよ汝はるを僅う二石一重病  
 速く瘡を癒色ぬのこ一而して汝  
 俗学業改ふ成りて故郷に歸る尔より  
 以来此を呼んで甘露水と稱す



開山家傳



開山家傳

美しき字は甘露水に備文を取せり  
猶存せり法入争て竹筒に入せ持ぬ  
休むるも必ぞ效ありと云へり

嘉永年中此頃近江の國より所々甘露湯  
を所々一處ある政あり湯山の隣村な  
る大島村の農夫利冬衛の家より食物  
乞ひするに同家乃ち彼名具するん事

憐むと云り如く慈父母は請ふて家も留  
る衣衣の如くを由み毎へけり成る并祀  
乃ち靈験を語りいそけり病も信心受服せば  
利を彩ひ耶と懇々請ふれば彼乃ち  
あるもの智因開敷一節もや童如幼  
随ひ文より白く并山形影あり詣り業障除滅  
を祈ると常々急あり志が成時何れと云

影前あいにぜんよ詣まゐて去さんとする時とき不ふ田でん邊へんなるかたを  
 相あひま之の伸のひて行あゆ歩み自由と由ゆり日ひ頃ころの大おほ願ねん成じやう  
 就よせりと嬉うれしあいにんを好このむ自みづら顔かほ面めんを  
 志して事こと蹟せきを海うみに記しるして影前あいにぜんよ備そまへり  
 ありと色いろ色いろしうれありけられ人ひと隨ま志し  
 して靈れい徳とくを信しんじむるより好このむよりある  
 安政あんせい五年十月の頃ころ當あた國くに新あらた田た郡ぐん押おし切きり村むらを

正ただ田でん樂らく志しとて紺こん屋や波なののつ再またのよ初はつ里り  
 て望もち靴くつを危あやれさる事こと又また交まじ應おん二に年ねん友とも  
 野の州しゅう朽く木ぼく常じょう部ぶ村むら箇か部ぶ利り古こ雨うは長なが男おとこ某なにか  
 う休やす信しん其その病やまひを聞きくある福ふくりえ活かきし  
 小こ成せい應おん務む多た好このむ怒いけられ畧りやくす  
 海うみの音ね龍りゆう上人じやうじん傳でん

此實色甚

檀大講家河川筆家畫此水畫并畫



跋



古曰凡為文寧拙毋巧寧  
朴無華寧粗無弱寧辟毋  
俗頃見新田吞龍尊者之  
傳其文幸脫巧集弱俗之  
弊焉頗足傳勝迹於千載



矣蓋於遺孫而盡孝於祖  
先者必夫可如是也歎附一  
語以表隨喜之志

戊寅四月

傳通院沙門行誠



明治十一年五月二日 版權免許

出版人

權大講義今井靈專

發兌人

東京府平民

木林江佐七

第ニ大區七小區飯倉町  
五丁目三十番地

電話芝罘一七四番  
電話口芝文京三二二番

10440

御 注 意

- 本は大切に扱ひましょう。
- 本の轉貸借はお断りします。
- 10日間の期限に必ず返して下さい。
- 本を汚損または紛失した時は同一の本  
又は相当代価を辨償していただきます。

群馬縣立図書館

前橋市榮町10番地

(電話3008番)

